神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

『金瓶海詞話』をめぐって

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2007-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐藤, 晴彦, Sato, Haruhiko メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/596

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

『金瓶梅詞話』をめぐって

佐　藤　晴　彦

はじめに

筆者はこれまで拙稿「『三遂平妖伝』は何時出版されたか？」，「国家図書館蔵『水滸伝』残巻について―“嘉靖”本か？」などにおいて，異体字の変遷を根拠としてその成立時期や出版時期について論じてきた。[(1)] その過程で，とりわけ『水滸伝』の成立時期を論じた時，どうしても気になってきたのが『金瓶梅詞話』の成立時期である。

『金瓶梅詞話』の成立時期は嘉靖期なのかそれとも万暦期なのか，これまでに何度も議論がなされてきている。しかし，それを問う前に『水滸伝』の成立時期が先ず問われなければならないだろう。『金瓶梅詞話』が『水滸伝』をベースに成立した以上，先の水滸伝の成立時期が明確にならなければ，当然金瓶梅の成立はそれ以上遡れないわけであるから，金瓶梅の成立もはっきりしなくなるからである。佐藤2005はまさにその問題を取り上げ，「国家図書館蔵の水滸伝の残巻は嘉靖期に成立したのではないか。」との結論を得た。

さあ，次は金瓶梅と思っていたのだが，ただその思いはあっても実際着手してみると事はなかなか思い通りにはかどらず，いたずらに時間ばかりが過ぎてゆく。今回は時間的な関係もあり，すべてを調査できたわけではなく中間報告というかたちでしか公表できないのが残念である。調査した回数は1回～12回及び50回～100回の62回分で，全体の6割強にあたる。こういう不完全な形でも公表する気になったのは，那辺に問題があるのかということを

示すのが急務と考えたからである。ためにいろいろな面に話題が飛ぶと思われる。「『金瓶梅詞話』をめぐって」という曖昧模糊としたタイトルにした所以である。

1.0 『金瓶梅詞話』のテキスト

本論に入る前に少しテキストの吟味をしておきたい。あらためて「『金瓶梅詞話』のテキスト」と言っても結局は万暦丁巳序の『新刻金瓶梅詞話』(以下，詞話本と略称)しかなく，それが日本所蔵のものか中国語所藏ものか，その影印本にどういうものがあるかということでしかないが，その影印本出版の際，何らかの手が加えられたフシがあり，若干の問題があるためテキストの問題を取り上げざるを得ない。

楊鴻儒2007では詞話本の系統のテキストとして次のようなものを挙げている。

(1) 北平図書館蔵詞話本

(2) 慈眼堂蔵本

(3) 古佚小説刊行会影印本

(4) 文学古籍刊行社影印本

(5) 聯經本

(6) 太平本

それぞれの特徴を楊鴻儒2007によって要点をまとめると，次のようになる。

(1)は北平琉璃廠の古書店文友堂の太原支店が，1931年に山西の介休県で購入し，その後北平図書館が購入したもの。抗日戦争期にアメリカ国会図書館に預けられ，1975年に台湾故宮博物院に返還された。(3)の古佚小説刊行会の影印本は本書を影印したもの。

(2)は日本の日光山輪王寺慈眼堂所蔵にかかるもので，北平図書館蔵と同版。1941年豊田穣氏が『某山法庫規観書録』で初めて紹介する。1963年，日本の大安が棲息堂本と合わせ，影印出版，世に「大安本」と言われている。(小

論では「大安本」と略称する）

(3)は1931年に山西で発見された(1)を，当時北京大学教授であった馬廉氏が1933年に縮印出版したもの。52回の欠葉部分は崇禎本で補い，崇禎本の挿絵120幅を付している。（小論では「古佚本」と略称する）

(4)は文学古籍刊行社が1957年に(3)を底本として影印したもの。ただ影印するさいに手を入れたため誤りが多くなり，ある程度詞話本の価値を落としてしまっている。1988年４月に再版。（小論では「古籍本」と略称する。小論で用いたのは1988年版である。）

(5)は1978年に台湾の聯經出版事業公司が台湾故宮博物院の原刻本を復元したもので，しかも原本と同じ大きさ，朱筆の改訂や印章などすべて朱で復元したので見やすく，現在最も原本に近い版だといえる。（小論では「聯經本」と略称する）

(6)の正式な書名は『全本金瓶梅詞話』，1982年香港太平書局から出版される。「出版説明」では1933年の古佚小説刊行会のものを複製したとあるが，実際は文学古籍刊行社の複製である。ただ原本の明らかな誤りは訂正されているところがある。

小論では(2)(4)(5)を使用した。崇禎本は北京大学出版社が1988年に影印出版した『新刻繡像批評金瓶梅』を使った。

1.1　各テキスト間の異動

筆者が詞話本のテキストを調査した限りでは，必ずしも楊鴻儒2007が指摘する通りではないところもある。今，筆者が気づいた点を表にすると表１のようになる。

こうした改訂には何のためになされたのか理解に苦しむことが多い。1)，3)，4)は明らかに改悪であるし，6)，7)，10)に至っては，一体何を考えてこういう書き換えをしたのか全く理解できない。以下，少し詳しく見てゆきたい。

表1　大安，古籍，聯經三本の異同(一部)

該当箇所	(2) 大安本	(3) 古籍本	(4) 聯經本
1) 74.3.b.4[2]	我没件好皮袄	披(墨で手偏を加える)	披(墨で手偏を加える)
2) 75.17.a.9	就乞他在前邊	吃(墨で口偏を加える)	吃(墨で口偏を加える)
3) 76.4.b.11	那月娘忍不住笑了	“身”の如き字に改める	“身”の如き字に改める
4) 76.4.b.11	玉樓道賊奴才…	“賊”の如き字に改める	“賊”の如き字に改める
5) 76.24.b.10	他望俺倪師父…	他(墨で改竄)	他(墨で改竄)
6) 78.10.a.9	那陣上刷刺刺	土(墨で“一”を加え改竄)	土(墨で“一”を加え改竄)
7) 78.10.版心	十	“七”に改竄	“七”に改竄
8) 78.13.b.8	懶待動旦	改訂なし	弾(“旦”の上に朱で改訂)
9) 78.14.a.11	王徑	經(墨で行人偏を糸偏に)	經(墨で行人偏を糸偏に)
10) 88.8.b.8	十分胖大	干(墨で“一”を加え改竄)	干(墨で“一”を加え改竄)

1.1.1　古佚本と古籍本

問題は，「では最初の影印本である古佚本がどうなっているか」である。古佚本の状態如何によって，どの段階で影印本に手が入ったかが明らかになるからである。表1に挙げた箇所を古佚本で確認すると，古佚本では7)の版心の“十”は“十”のままであり，“七”に改竄していない点を除くと，すべて古佚本に合致した。[3] ということは，影印本における摩訶不思議な改竄は，一部を除いて古佚本からすでに始まっていたということになる。楊鴻儒2007は，(4)の古籍本に関して，“然本本影印时，错误较多，在一定程度上失却了词话本的真实性。”とし，古籍本に見られる改竄を古籍本出版の際の責任としているが，古籍本そのものの改竄は極一部であって，大半が古佚本に始まっているらしいことを考えると，それは濡れ衣というべきであろう。

1.1.2　聯經本

楊鴻儒2007は聯經本について“该本的特点是据台湾故宫院原刻本一一还原”としている。もしこれが額面通り行われたのであれば，“是目前最为接近原本风貌的一种印本。”という楊氏の指摘通りである。しかし，聯經本の“出版説明”を見れば，果たしてそうなのだろうかという疑問を抱いてしまう。それは“出版説明”の“三、”で“這一部聯經版的「金瓶梅詞話」就是依據傅斯年先生所藏古佚小説刊行會影印本、並比對故宫博物院珍藏的萬曆丁巳本，

整理後影印；”と書かれているからである。「古佚刊行会影印本」が先に挙げられているのであって，しかも“依據…、並比對…”であるから。むしろ「古佚本」を底本にし，原本を参照したと理解できる書き方である。原本ではなく，古佚本を底本としたのであれば，聯經本と古佚本が合致することも頷ける。が，一方で7）のような現象を見ると，「底本は古佚本ではなく，古籍本ではないか。」という疑いも抱いてしまう。

古籍本，聯經本には書き込みがあるが，原本に朱で書き込まれていたのを古籍本が技術的もしくはコストの問題があったのか，黒で復元したのに対し，聯經本は朱で復元したことが遥に見やすく，評価できる。ただ，一部朱で復元できていない箇所もあり，朱による復元が徹底されていないうらみがある。さらに古籍本で見られる改悪の面をそのまま受け継いでしまっている箇所も存在し，今後聯經本を使用する場合に注意すべきである。しかし，もしこの黒で残された箇所が古籍本（古佚本も同じ）で改悪された箇所であり，朱で復元された箇所が原本の書き込みであるのなら，それは見事な腑分けだと言えるが果たしてそこまでの配慮がなされたかどうか何とも言えない。

以上でテキストの検討を終え，本論に入ることにしよう。取り扱う文字表記は“jiao”“genqian”“li”“ge”の4つ及びその他である。

2.0　文字表記

2.1　“jiao”について

『水滸伝』と『金瓶梅詞話』における“jiao”の表記法については，佐藤2005において以下の二点を指摘した。要約するのが困難であるから，やや長くなるが以下に引用する。

① 「周知の如く，『金瓶梅』は『水滸傳』から生まれた物語である。では『金瓶梅』は『水滸傳』のどの版を底本として生まれたのかということが問題となるだろう。

例えば鄭振鐸1954のような版を底本とした仮定すればどうであろう。兼語動詞「jiao」の表記を巡っての結論は,

「…のごとき「叫」,「教」はいずれも『金瓶梅』においては「交」に書き改められている」(上野恵司1970)

となるであろう。『金瓶梅詞話』が兼語動詞の表記として,大量の「交」を使っているわけであるから當然の結論である。ところが『金瓶梅』の作者が底本としたのが,本殘巻のような版であったなら,兼語動詞「jiao」の表記としては當然「交」が引き繼がれることになり,『金瓶梅』に多くの「交」があったとしても何ら不思議ではない。『金瓶梅』の作者は,恐らく本殘巻のような版本を底本としたに違いない。」

② 「ところで『金瓶梅』の「交」を巡っては實はもう一つ問題がある。それは「交」を使っているのは『水滸傳』と重複する部分だけではない。他の箇所でも相當使っている。つまり『金瓶梅』に見える「交」は『水滸傳』からの繼承以外に金瓶梅の作者自身の言語の反映でもあるという側面をもつ。これはどう解釋すべきであろうか。

もし『金瓶梅詞話』が,かの『萬曆野獲編』が指摘する「聞此爲嘉靖間大名士手筆」という言葉を額面通り受け取り,嘉靖年間に成立したとすれば,兼語動詞「交」の説明はつきやすくなる。しかしそう斷ずるにはもう少し細かな檢討を必要とするだろう。」

要するに,

① 『金瓶梅』がどの『水滸伝』に基づいて物語を展開してきたかが重要な問題であり,それによっては結論も異なってくるので,『水滸伝』の版本の選択に配慮が必要であること。

② 『水滸伝』に基づいていない回でも大量の“交”が使われている点を考慮に入れると,この“交”は『金瓶梅』の作者の言語であるということ。

の二点である。小論では②が問題となる。

そこで今，詞話本における“jiao”の使用頻度を表にしてみると表２のようになる。

この表から次のようなことが分かる。

(1) “交”は50回～59回の方が他の回に比して異常に多い。

(2) “教”は70回～79回の頻度が“jiao”の中で一番高い。

(3) “叫”は80回～89回以外はすべて頻度が一番低い。

表２　詞話本における“jiao”の使用頻度

	交	教	叫
1回～ 12回	38	45	9
50回～ 59回	107	86	32
70回～ 79回	12	255	19
80回～ 89回	17	105	6
90回～100回	22	118	13
	196	609	79

それぞれについて考えてみよう。

(1) １回～12回が『水滸伝』をベースにしているところが含まれているから，『水滸伝』に“交”が多く使われているのであれば，もっと頻度が高くてもよさそうだが，50回～59回の方が遥に頻度が高い。『水滸伝』をベースにしていない箇所でも大量の“交”が使用されているということは，この“交”という表記は金瓶梅の作者のものであったというのは間違いない。

また“交”が最も多く使われている50回～59回の中で，一体どの回に“交”がよく使われているのかも興味ある問題であるから，それを見てみると，表３のようになった。

表３から，“交”が50回～52回に集中していることは一目瞭然である。こ

表３　詞話本50回～59回における“jiao”

	交	教	叫
50回～52回	96	3	1
53回～57回	10	25	28
58回～59回	1	58	3

れまでも53回～57回までは異質部分が含まれているとしばしば指摘されているが[4]，その問題の回数ではなくその直前の回数であるから，50回～52回になぜ“交”が集中して使われているかというのは，別の角度からの考察が必要であり，今後の課題となる。

筆者が“jiao”の表記に拘るのは，もし金瓶梅が万暦に成立したのであれば，これだけ大量の“交”が使われるはずがないと考えるからである。それを示すため“嘉靖”本『水滸伝』残巻[5]と旧本『平妖伝』の“jiao”の使用頻度を挙げよう。

表4　“嘉靖”本『水滸伝』残巻，旧本『平妖伝』における“jiao”の使用頻度

	交	教	叫
“嘉靖”本	160	4	1
平妖伝	267	5	0

一見して分かる通り，“嘉靖”本残巻も平妖伝も“交”が圧倒的に多い。“嘉靖”本は僅か8回分しか残っておらず，8回だけでこの頻度であるから，100回全体であれば，単純計算で“交”は2000コ使われているということになる。それに比べれば詞話本における“交”は決して多い数とはいえないが，容與堂『水滸伝』ともなると“交”は全く姿を消してしまっているということを考慮に入れれば，詞話本の“交”が如何に多いかが理解できよう。

興味あるのは，先にふれた聯經本の朱による書き込み部分である。

(1)　誰交你要我來仮(ママ)的（91.11.b.7：崇禎本は“仮的”を削除する。13.a.3）

この“交”に対し，朱で“教”を書き加え修正を試みている。この書き込みは原本の誤りをかなり熱心に書き換えていっている箇所と，全然書き換えが行われていない箇所とがありその書き換えの態度そのものはかなり恣意的だが，ある程度原文理解の助けとなるところがある。問題は何時，誰がこの書き込みを行ったのかということである。今のところそれを判断する手がかりが見つからないが，今後追及していくべき問題だと考えている。

ここでは少なくとも原本の“交”を“教”に書き換えている点が，その後の“交”→“教”へと統一されていく過程を窺えることができ，興味深い。

さらに興味あるのは，“交”をめぐって，詞話本から崇禎本に移行する際の書き換えである。例えば先にふれた“交”を多く使っている50回～52回を例に挙げてみよう。

	詞話本	崇禎本
(2)	你且不去罷，交他兩個先去。(51.8.a.7)	你且不去罷，教他兩箇先去。(9.a.9)
(3)	又交他取耳，掐捏身上。(52.3.a.7)	又叫他取耳，掐捏身上。(3.b.4)

上に挙げた例のように，詞話本に“交”としているところを，崇禎本では“教”や“叫”に書き換えたり，あるいはその前後を含め削除したりしている。詞話本で合計96例の“交”が崇禎本でどのように変化しているかを示すと次のようになる。

表5　詞話本から崇禎本へ“交”の書き換え

	ママ(交)	教	叫	削除	計
50回	18	0	0	2	20
51回	16	24	0	1	41
52回	8	23	1	3	35
計	42	47	1	6	96

詞話本にあった96カ所の“交”のほぼ半数にあたる47カ所が“教”に書き換えられている。“教”に書き換えられたものに加えて，削除されたものと“叫”に書き換えられたものを数に入れると，54カ所という過半数が“交”でなくなってきているということになる。これは“交”“教”の併用から，徐々に“教”に統一されていく過程を示しているのであろう。かつて佐藤1986a，1986bで指摘したように，馮夢龍が二十回本『平妖伝』を増補改訂し四十回本とした過程では，もと267カ所使われていた“交”のおよそ9割にあたる約240カ所を“教”に書き換えたのとは若干異なる比率であるが，ある文字表記が他のものに変化もしくは統一されていく過程は，決して一時

に完成するのではなく，地域的な差，時間的な差及び個人差が存在していたのであろうことを如実に示していると言える。

注意しなければならないのは，こうした“jiao”を巡っての改訂が，常に“交”→“教”という単一方向の改訂であって，逆の“教”→“交”という例は一例もないという点である。この点にも“交”が淘汰されていく過程を見てとることができるであろう。

(2)上で見たように，詞話本では“交”の使用頻度は大変高いものである。しかし，“教”となればさらに使用頻度が高く，“交”のほぼ三倍使われているのであって，“jiao”の表記法として中心的存在であることがうかがえる。これは表4で見た“嘉靖”本『水滸伝』と旧本『平妖伝』での“交”と“教”の使用頻度と明らかに異なる。詞話本で見られる“交”に比して“教”が圧倒的に多いというのは詞話本が出版された万暦年間における文字表記の趨勢を反映しているものと思われる。つまり抄本でつたえられていた当初は，“交”がさらに大量に使用されていたのが，伝写を経て刊本として印刷される段階では，相当程度万暦時期の文字表記に換えられたであろう。現在われわれが目覩しているその万暦本なのである。

(3)“叫”は“交”“教”に比べると，使用頻度がぐんと落ちる。しかし表4の“叫”と比べると，使用頻度ははるかに高い。これも万暦の文字表記の平均値を反映しているものと思われる。

2.2 “根前”から“跟前”へ

詞話本の書き込み及び崇禎本での書き換えという現象に関して，“交”から“教”への変化と同様の現象を示しているのが“根前”から“跟前”への変化である。元代では専ら“根前”が使われ，“跟前”と表記されるようになるのは明代からである。今，詞話本における“根前”“跟前”の使用頻度を示すと，次のようになる。

表6　詞話本における“根前”“跟前”の使用頻度

	根前	跟前	計
1回～ 12回	4	3	7
50回～ 59回	9	6	15
70回～ 79回	15	15	30
80回～ 89回	9	5	14
90回～100回	13	5	18
計	50	34	84

この“根前”に関しても，聯經本では先の“交”の場合と同じように，朱によって「木偏」を「足偏」に書き換えているところがある。

(4)　或有根前不得説話，將心事寫成…(82.1.a.9)

(5)　月娘見妳子抱孝哥兒到根前（85.3.b.1）

(6)　在根前不敢言語（94.9.a.4）

この3つの“根前”の木偏は朱で足偏に書き換えられている。つまりこの書き換えをした人物が生存した時期には，“根前”という表記では抵抗を覚えるようになっていたのである。さらに興味あるのは，やはり崇禎本で“根前”の相当数が“跟前”に書き換えられていっているという事実である。表6に挙げた“根前”が崇禎本でどのように書き換えられたかを示したのが表7である。

表7　“根前”をめぐる詞話本から崇禎本への書き換え

	（詞話本）	（崇　禎　本）			
	根　前	ママ	跟前	面前	削除
1回～ 12回	4	2	1	0	1
50回～ 59回	9	4	5	0	0
70回～ 79回	15	3	11	0	1
80回～ 89回	9	3	4	1	1
90回～100回	13	7	5	0	1
計	50	19	26	1	4

詞話本で50か所使われていた“根前”は崇禎本では19か所を残すのみで，その他は“跟前”“面前”に書き換えられるか削除されている。ただ“交”→“教”のような単一方向ではなく，一か所だけ詞話本の“跟前”が崇禎本で

“根前”に書き換えられたところがある。

	詞話本	崇禎本
(7)	不防玉樓走到跟前叫道…(11.3.a.2)	不防玉樓走到根前叫道…(11.3.a.9)

これは非常に珍しい例だと言える。

結局詞話本と崇禎本における“根前”と“跟前”の比率は

	詞話本	崇禎本
根前：跟前	50：34	20：59

となり，“根前”から“跟前”へと推移していく様子がはっきり見てとれる。詞話本が仮に万暦年間に書かれたとしたら，これほど大量の“根前”を使ったと認めることになるわけで，万暦年間には到底あり得ないことである。

2.2 “li”について

詞話本における方位詞“li”の使用頻度を示すと表8のようになる。

表8　詞話本における“li”の使用頻度

	裏	里	裡$_1$	裡$_2$
1回～ 12回	21	134	283	1
50回～ 59回	48	385	248	2
70回～ 79回	22	346	290	7
80回～ 89回	41	120	157	19
90回～100回	40	99	223	3
合　計	172	1084	1201	32

注：“裡$_1$”“裡$_2$”はそれぞれ「示偏＋里」「衣偏＋里」を示す。

この方位詞“li”の使用頻度が，何時の頃の状況かを判断するために，佐藤2005，2006で示した元末，明初中期における“li”の使用頻度を見てみると，表9のようになる。[(6)]

“裏”や“里”は古くから使われている表記法であり，表9によっても各資料に満遍なく使われていることが見てとれる。問題は“裡$_1$”“裡$_2$”である。“裡$_1$”は29の『琵琶記』あたりから普及し始めてきている様子が見てとれるが，“裡$_2$”は32の『十段錦』で若干使われているものの，まだ普及し

表9　元末，明初中期“li”の使用頻度

	裏	里	裡$_1$	裡$_2$
1　太平樂府（至正11年［1351］）	87	123	4	0
2　大誥武臣（洪武21年［1388］）	40	0	0	0
3　辰鈎月（永樂 2年［1404］）	12	10	0	0
4　義勇辭金（〃 14年［1416］）	10	8	0	0
5　降獅子（〃 14年［1416］）	5	5	0	0
6　蟠桃會（宣德 4年［1429］）	4	0	0	0
7　八仙慶壽（〃 7年［1432］）	14	2	0	0
8　常椿壽（〃 8年［1433］）	5	13	0	0
9　復落娼（〃 8年［1433］）	26	4	0	0
10　十長生（〃 9年［1434］）	4	3	0	0
11　神仙會（〃 10年［1435］）	6	3	0	0
12　嬌紅記（〃 10年［1435］）	55	174	0	0
13　薛仁貴（成化 7年［1471］）	25	1	0	0
14　石郎駙馬（〃 7年［1471］）	13	30	0	0
15　歪烏盆（〃 8年［1472］）	10	3	0	0
16　朱子語類（〃 9年［1473］）	（ ?	?	2	4 ）
17　開宗義（〃 13年［1477］）	12	2	0	0
18　出身傳（〃 ?年［ ? ］）	1	9	0	0
19　陳州糶米（〃 ?年［ ? ］）	14	1	0	0
20　認母傳（〃 ?年［ ? ］）	5	31	0	0
21　曹國舅（〃 ?年［ ? ］）	15	19	0	0
22　張文貴（〃 ?年［ ? ］）	5	0	0	0
23　白虎精（〃 ?年［ ? ］）	5	1	0	0
24　看燈傳（〃 ?年［ ? ］）	8	29	0	0
25　孫文儀（〃 ?年［ ? ］）	1	22	0	0
26　孝義傳（〃 ?年［ ? ］）	1	0	0	0
27　白兔記（〃 ?年［ ? ］）	49	90	0	0
28　西廂記（弘治11年［1498］）	11	157	0	0
29　琵琶記（嘉靖27年［1548］）	49	148	57	1(1)
30　寶劍記（〃 28年［1549］）	11	88	24	0
31　古董解元（〃 36年［1557］）	51	0	79	0
32　十段錦（〃 37年［1558］）	212	8	8	4
33　古名家本（萬曆17年［1589］）	4	332	47	0

注：数字には“這里／那里”の“li”も含まれている。

た段階と認めるほどではない。つまり“裡$_2$”の普及は万暦以降のものと思われる。

そこで改めて表8を見ると，“裡$_1$”“裡$_2$”では圧倒的に“裡$_1$”が多く，“裡$_2$”と比べものにならないくらいである。この“li”の使用頻度も恐ら

く嘉靖期のものの反映であろう。しかし，数が多くないとはいえ，“裡$_2$”が使われているところを考えると，そこらが万暦時期に手が加わった結果ではないかと思われる。

因みに“li”についても興味ある書き込みがある。それは詞話本の“里”に「示す偏」が書きこまれているのである。

(8) 衙門里房令史和衆節級來稟事（72.9.a.3）

(9) 戲子用海鹽的，不要這里的（72.19.b.1）

(10) 到明日舖子里拿半個紅段子（75.5.b.4）

これらの“里”には「示す偏」が加えられている。それが「衣偏」ではなく「示す偏」であるのが面白い。このことから直ちに原本における朱の書き込みが嘉靖年間と言えるかというと，事はそう簡単ではない。確かに上で“裡$_2$”は万暦頃から普及したと述べたが，それは何も“裡$_2$”の普及によって“裡$_1$”が即衰退していったということを意味するわけではない。“裡$_1$”は現在でこそ使われなくなったから，現代人の意識からは消えてしまっているが，実は清末まで脈々と書き継がれているのであって清末でも頻度数は結構高かったようである。従って，“里”に対する書き込みが「衣偏」ではなく「示す偏」であることは，この書き込みの時期が嘉靖年間である蓋然性は高いものの，嘉靖年間だと断定はできない。この書き込みが何時行われたかについてはもう少し検討しなければならないだろう。

なお聯經本は例文(9)を朱でなく，黒で復元しているが，この箇所，原本は朱で書かれていたのに間違いなく，聯經本も朱で復元すべきところであった箇所だと思う。

2.3 “ge”について

詞話本における“ge”の使用頻度を示すと，表10のようになる。

一見して分かる通り，詞話本では“個”が圧倒的に多く，正に桁違いという様相を示している。この“ge”の使用頻度がどういう位置づけになるのか

表10　詞話本における“ge”の使用頻度

	箇	个	個
1回～ 12回	84	0	420
50回～ 59回	13	160	656
70回～ 79回	1	120	600
80回～ 89回	30	11	295
90回～100回	181	2	270
合　計	309	293	2241

表11　元末，明初，中期における“ge”の使用頻度

	箇	个	個
1　太平樂府（至正11年［1351］）	156	92	0
2　大誥武臣（洪武21年［1388］）	26	0	0
3　辰鈎月（永樂 2年［1404］）	52	0	0
4　義勇辭金（〃 14年［1416］）	16	0	0
5　降獅子（〃 14年［1416］）	11	0	0
6　蟠桃會（宣德 4年［1429］）	28	0	0
7　八仙慶壽（〃 7年［1432］）	22	0	0
8　常椿壽（〃 8年［1433］）	28	0	0
9　復落娼（〃 8年［1433］）	68	0	0
10　十長生（〃 9年［1434］）	13	0	0
11　神仙會（〃 10年［1435］）	40	0	0
12　嬌紅記（〃 10年［1435］）	70	73	0
13　薛仁貴（成化 7年［1471］）	1	38	0
14　石郎駙馬（〃 7年［1471］）	0	47	0
15　歪烏盆（〃 8年［1472］）	0	58	0
16　開宗義（〃 13年［1477］）	0	53	0
17　出身傳（〃 ?年［ ? ］）	0	21	1
18　陳州糶米（〃 ?年［ ? ］）	0	61	0
19　認母傳（〃 ?年［ ? ］）	0	36	0
20　曹國舅（〃 ?年［ ? ］）	5	88	8
21　張文貴（〃 ?年［ ? ］）	0	41	0
22　白虎精（〃 ?年［ ? ］）	0	13	0
23　看燈傳（〃 ?年［ ? ］）	1	28	3
24　孫文儀（〃 ?年［ ? ］）	2	35	0
25　孝義傳（〃 ?年［ ? ］）	0	52	0
26　白兔記（〃 ?年［ ? ］）	4	127	0
27　西廂記（弘治11年［1498］）	178	0	0
28　琵琶記（嘉靖27年［1548］）	29	213	0
29　寶劍記（〃 28年［1549］）	117	2	0
30　古董解元（〃 36年［1557］）	220	0	6
31　十段錦（〃 37年［1558］）	395	1	0
32　古名家本（萬曆17年［1589］）	244	353	81

を見るため，“li”の場合同様，元末，明初，中期の“ge”の使用頻度を見ると，表11のようになる。

表11を見れば，“箇”“个”は満遍なくというわけではなく，資料によって偏りがあることが伺える。それでも古くから使われていたことが理解できる。一方，“個”の方は歴史的には最も遅れて使われ出したらしく，その普及は万暦期に始まるらしい。

そこで改めて表10に戻ると，“個”が他を圧して使われていた。“個”の普及が万暦以降だとすると，表10が示しているのは明らかに万暦以降の現象である。これまで“交”“根前”“裡１”を通じて見た傾向は，いずれも嘉靖期の現象と看做せるものであったが，“個”だけがそうではなく万暦の現象ということになってきた。これは一体どう解釈すればいいのであろうか。筆者自身，これに対してはまだ明確な結論を得ていないが，詞話本が刊本として刊行される段階で“個”の部分に相当の手が加わったのであろうと思う。

2.4　その他

ここで扱うものは，詞話本の成立時期を判定する場合，あるいは参考になるかも知れないと思うものをあげておく「覚え書き」のようなものである。ただ，いくつか挙げようと思っていたが，事情により“厡”のみ取り上げることとした。

2.4.1　“厡”という字

“廳”の異体字の“厡”が見える。

⑾　堂客都在灵旁厡内圍着幃屏…（80.4.b.1）

⑿　…就在統制府衙後厡居住…（100.3.b.2）

この“厡”について，赤松紀彦他2007で次のように述べられている。

「このうち「鐵拐李」に見える「廳」の略字「厡」は，通常明代の刊本にしか見えないものである。[(7)]」

この“廳”の異体字はほぼ次のようにしてできたものと思われる。先ず，

“廳”の異体字である“厅”が“聴”の意味で使われた。その例は『劉知遠諸宮調』に見える。また元代白話碑の１つ「闊端太子重修草堂寺令旨碑」(1243年)にも見える。[8] さらに『劉知遠諸宮調』では同時にこの“厅”に口偏を加えた“听”という字体も“聽”の意味で使われている。この“听”が後になって“听”という字に変化していったのである。かくして元代になると，「聞く」という意味ではほとんどこの“听”が使われるようになり，現在の簡体字もこの字を採用されていることは周知の通りである。ところが一方，“听”の字体が思わぬ文字に影響を与えた。それが“廳”の字であり，「麻だれ」の中の“聽”を，その異体字である“听”で代用し，“厈”という字体が生まれるようになった。それは明代である。筆者は明代の資料で“厈”という字体を複数見た記憶があるが，残念ながらどの資料であったかどうしても思い出せない。[9] もし，この“厈”という字体が使用された時期が特定できれば，詞話本成立時期を判定する根拠となりうる。

ま と め

以上，『金瓶梅詞話』をめぐるいくつかの問題を指摘してきた。ポイントをまとめると以下のようになる。

(1) テキストの問題

詞話本には数種の影印本が出版されているが，「影印本」と称しつつ，出版するにあたり，手を加えた箇所がある。それがどの段階で加えられたのか，それを明確にする必要がある。筆者のこれまでの調査では，恐らく最初の影印本である古佚本ですでに始まっていたと思われる。

(2) 原本書き入れの問題

誰がどの時期になした所業か分からないが，原本に朱で書き換えた箇所がある。聯經本は「出版説明」において，それを原本通り朱で復元したと述べているが，一部朱ではなく黒で復元している箇所があるので，(1)で述べた影印本出版の際に手が加えられた箇所と紛らわしくなっているため，注意しな

ければならない。またこの朱を誰が入れたのかを明らかにするのは不可能かも知れないが，何時という点はある程度明らかにできる可能性があるので，この点も検討されるべきであろう。

(3) 詞話本の成立時期

“jiao” “genqian” “li” の異体字の使われ方から見ると，詞話本は恐らく嘉靖年間に成立したものと思われる。“ge” の表記法からは万暦年間に出版される直前に相当の手が入ったものと思われる。“廳” の異体字 “厡” が何時から何時まで使われていたかを明確にできれば，詞話本成立の時期をもう少し限定できるかも知れない。

注

(1) 佐藤2002，佐藤2005を指す。また佐藤2006の対象は戯曲であるが，その趣旨はやはり同様のもので，文字表記により，『改定元賢伝奇』に反映されている言語の時期を推定したものである。

(2) 数字はそれぞれ，回数，葉数，表裏，行数を示す。

(3) この確認作業は，日本学術振興会外国人特別研究員・韓燕麗さん(京都大学人文科学研究所所属)の手を煩わせた。記してお礼を申しあげたい。

(4) 53～57回の真偽問題に関しては，潘承玉1999などが詳しく論じている。

(5) 嘉靖に“　”を付したのは，水滸伝の成立が嘉靖だろうとする筆者の説であり，一般的に認められたわけではないので，「いわゆる」という意味である。

(6) 各テキストの版本は以下の通り。

太平樂府：四部叢刊本
大誥武臣：『皇明制書』上巻(1966年１月，古典小説研究会)
辰 鈎 月：周藩原刻本(中央研究院歴史語言研究所傅斯年圖書館本)
義勇辭金：　〃　(『全明雜劇４』臺灣鼎文書局，1979年影印本)
降 獅 子：　〃　　〃
八僊慶壽：　〃　(中央研究院歴史語言研究所傅斯年圖書館本)
常 椿 壽：　〃　　〃
十 長 生：　〃　　〃
神 仙 會：　〃　　〃
嬌 紅 記：『古本戯曲叢刊初集』
薛 仁 貴：『明成化説唱詞話叢刊』(臺灣鼎文書局，1979年影印本所収)
石郎駙馬：　〃　　〃
歪 烏 盆：　〃　　〃
朱子語類：『朱子語類』(臺灣正中書局，1973年影印本)

開 宗 義：『明成化説唱詞話叢刊』（臺灣鼎文書局，1979年影印本所収）
出 身 傳：　　〃　　〃
陳州糶米：　　〃　　〃
認 母 傳：　　〃　　〃
斷曹國舅：　　〃　　〃
張 文 貴：　　〃　　〃
斷白虎精：　　〃　　〃
看 燈 傳：　　〃　　〃
孫 文 儀：　　〃　　〃
孝 義 傳：　　〃　　〃
白 兔 記：　　〃　　〃
西 廂 記：『奇妙全相註釋西廂記』（臺灣世界書局，1976年影印本）
琵 琶 記：『新刊元本蔡伯喈琵琶記』（『全明傳奇』所収。但し，不鮮明な箇所は『古本戯曲叢刊初集』本で確認した）
寶 劍 記：『古本戯曲叢刊初集』
古董解元：『古本董解元西廂記』（中華書局，1963年影印本）
十 段 錦：『雑劇十段錦』（嘉靖戊午仲夏紹陶室刊）

16の『朱子語類』の数字を（　）で括ったのは，『朱子語類』すべてを調査したわけではなく，塩見邦彦1985に拠ったためである。29の『琵琶記』の“裡１”を「１（１）」としたのは，確實に“裡２”と認定できるのが一箇所，文字が不鮮明なため“裡２”と断定はできないが，“裡２”らしいと思えるのが一箇所という意味である。

(7) 赤松紀彦他2007，p.13

(8) 渡部洋1996「序文」参照

(9) 最近，京都大学の木津祐子氏から，琉球抄本『人中畫』にも“厠”という字体があるということを教わった。木津氏のお話では琉球資料そのものは清代のものだが，その元になったものは明代であり，その影響を受けたため，抄本に残ることとなったのであろうということであった。筆者も30年前に琉球資料を扱ったことがあったが，当時，こういう問題意識がなかったため，全く気付かなかった。

参考文献

赤松紀彦他 2007 『元刊雑劇の研究―三奪槊・氣英布・西蜀夢・單刀會』汲古書院

潘　承玉 1999 「『金瓶梅』五十三至五十七回真偽論」，潘承玉『金瓶梅新証』（黄山書社1999年）所収

佐藤晴彦 1986a 「《平妖傳》新探―馮夢龍の言語特徴を探る」『神戸外大論叢』第37巻第1，2，3号

――― 1986b 「《清平堂話本》《熊龍峯小説》と『三言』―馮夢龍の言語特徴を探る」『神戸外大論叢』第37巻第４号

――― 1996 「序文」渡部洋編『劉知遠諸宮調語彙索引』（好文出版）所収

――― 2002 「『三遂平妖傳』は何時出版されたか？―文字表記からのアプローチ」

『神戸外大論叢』第53巻第１号
――― 2005 「國家圖書館藏『水滸傳』殘巻について―嘉靖本か？」『日本中國學會報』第57集
――― 2006 「『改定元賢傳奇』はどの時期の言語を反映しているのか？」『神戸外大論叢』第57巻第１～５号
塩見邦彦 1985 『朱子語類口語語彙索引』中文出版
上野恵司 1970 「『水滸伝』から『金瓶梅』へ―重複部分のことばの比較―」『関西大学中国文学会紀要』第３号
渡部　洋編 1996 『劉知遠諸宮調語彙索引』（好文出版，1996年）
楊　鴻儒 2007 『細述金瓶梅』東方出版社